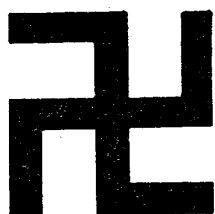


二、三の文様について

大 隅 為 三



洋の東西にわたり、自然現象を象徴化した記号、文様の一つに卍というものがあり、これを吾人は万字と称する。中国では古代から十の字があり「説文」には数之具也とあつて、十善の意を帯び完備の姿を意味する。即ち *Summum bonum* 即ち至善を十字によつて表わした。卍は十の字に比べて遙か後代に案出された形であろうけれども、それが若し中国でつくられたものだとするならば十の字とはどんな関係をもつたであろうか。或はビュヌーフ氏 *Eu. Burnouf* が問題としているように印度から仏教と共に移入したものとすべきであろうか。今日でも未だ決論には達しておらぬけれども、兎も角吉祥如意万寿無量を意味したことは疑を容れぬ。仏徒は吉祥万徳之所集と解していた。釈迦の軀を荼毘に附そうとしたがなかなか焼けない。そこで胸上に卍を書いたら忽ち焼き上つたと伝えられている。

考古学界の巨人ハインリッヒ・シュリーマン氏 *H. Schliemann* が先史時代の古都イリオン即ちトロイの廃墟から発掘した鉛材の女神、裸体のヴィーナスの性所上卍が斜に刻まれてあることは疑いもなく繁殖を象徴化した記号に相違ない。梵語では卍をスヴァスチカという。此言葉を分解すると *good to be* であつて鉤が反対の方向に曲つたものをサウヴァスチカ、鉤尖の発展した万字をナンジャヴァルタという。古銭学者として有名なトーマス氏の説に従えば万字は太陽の形であつて鉤の向きかたが廻転方向を示すのだという。アーリアン種族は太陽を卍によつて表わすと同時に水の流れ、水の渦にも万字類似の文様を用いた。希臘陶器殊にレキトスと称する片耳附徳利形の瓶器には必ず胴文の上方に雷文形のバンド模様がある。これをメアンドロス(メアンダー)という。河の名からとつた文様の名称である。メアンドロス河の流れと渦を象徴化したものでスヴァスチカの発展した構成である。必ずしも十字や万字の如く線の交叉から成立しているとは限らない。光の空を卍によつて表象せるものはトロイや前

七、六世紀頃の希臘の陶器文様に屢々見るところのものであつて、地紋のなかに卍があればそれは太陽と光である。万字が繁栄と光明とを意味することは必ずしもナチ・ドイツの発明ではない。一個の万字が中国では吉祥如意の記号となり印度では祝福の意味をもち、西方アーリアン種族間にあつては繁殖健康の象徴となつており、時間空間に遍通する形即ち無量寿無量光の姿は希臘文字ガムマ四個の字脚を結んだ文様によつて表現されたのであつた *crux ansata* である。卍の発展した形は文様学上ではグレックと称し、雷文紗綾形となつて動かすことの出来ない構成となつた。かくして原始人が或る物体を象徴化した卍や十字が後の時代には仏教耶蘇教等の宗教は勿論、学説のシムボル或は美術家の意匠として今なお生きているのだ。



浮彫、オリムピア、前五世紀

西洋の染織類に、文様意匠として鳳凰麒麟の形が現われたのは十字軍以後十四世紀からであつて、十九世紀の末紀頃までは希臘や他の国の神話に出て来るフェニックスとグリッ

プスなどと混同していたことは面白い事実だと思う。希臘神話のなかでは赤い鳥冠の靈鳥がいた。フェニキア風俗の赤帽と相通ずるところからこの鳥をフェニックス称した。六百年という長い年月を亜拉比亞砂漠で生存した後、ヘリオポリス市に現われ、自ら燃えさかる火中に身を投じて灰となり、その灰から自生して又六百年の生命を続けるという輪廻転生を象徴した鳥であるが、この鳥の対象となつている靈獣はグリップスである。麒麟などとは違つて極めて獷猛な怪獣だと信ぜられていた。胴体は獅子嘴と両翼は鷲、馬の耳、鬣は魚の鱗を持つ獣となつてはいるが、これは原始時代のグリフォンであつて、ヘロドトスの「ターリア」の巻に出て来る北部印度の蟻がグリフォンだという説はフィロストラートの著アポロニウス・チアネンジス *Apollonius Tianensis* 伝中に現われている。即ち「タ

「リア」の巻に見える印度の蟻は狗よりも稍々小さく狐よりも大にして砂を積むことなお希臘の蟻に類する。印度人はその蟻塚のうちより砂金を拾い袋を充たして急ぎ帰るを法とする。波斯人の説によれば、この蟻は臭覚が殊の外鋭どく直ちに人の臭気を感じて地下より出でて人を追う。その速なること如何なる動物も及ばぬほどなれば、いちはやく蟻の現われざるうちに逃げ



アンテミオン

出なければ何人と雖もこの蟻の為に命を奪われるべしという。これが実在していたグリフォンであつて、十四、五世紀以後染織文其他のものにモチーフとして用いられた、然し歐洲人のいうグリフォン、グリフィングリフィンは実をいえば中国の麒麟なのであつたが十九世紀に至りレイモン・ケークラン氏などの東洋学者が歐洲の文様に現われたフェニックスとグリフォンは中国渡りの鳳凰と麒麟だといふので、改めてフォンホアン、キーンと中国音で発音し前者との区別をはつきりしたのであつた。

飛鳥奈良朝以来の文様に忍冬唐草なるものがある。絵画彫刻工芸に、なくてはならぬ意匠のように考えられ今日と雖も十円札の裏にはこの文様を見ることが出来る。この忍冬は伝統に捉われた造幣局当事者の好みから加えられたものであろうけれども、この唐草の案出された事情というものに関し、研究している人は案外鮮ないことも不思議だと思ふ。我国建築界の權威によつて編纂された「英和建築語彙」には Honeysuckle という項を態々いれて「忍冬」と訳してあるが、彼等建築学会の諸氏でも忍冬（すいかづら）が希臘羅馬時代、ルネサンス或はゴシックなどの様式に用いられた例証を示めすことは出来ないと思ふ。筆者の知る範囲では西歐に於て Honeysuckle、(英) Chèvrefeuille (仏) が文様意匠として用いられたことはなかつたと思ふ。これ或は驢陀羅の希臘仏教美術のもたらしたパルム（棕櫚科の植物）唐草やアンテミオン anthemion の伝統やその実態の無智から、作家の身近に年中緑葉をそなへているすいかづらを聯想しつつ改作したものであるまいか。忍冬文様に見る花の形はいつでも上方に向つていることだけでもパルムの擬作と考へてよからう。

魚紋や貝尽などの優れた文様は染織や漆器などに

屢見るところのものであるが、我國のような海国であり、魚類を常食する民族の頭には文様意匠として当然浮び出る訳であるが、海と河に接し魚を食する民族といへば必しも日本のみとは限らないが、魚類をモチーフとした美術工芸品は先ず無いといつてよろしい。僅かに日本の影響を受けた和蘭に多少見ることが出来るが、唯それだけである。却つて紀元前一千年以上、何千年以上に遡るクレタ、ミノス文化に於て、土器の文様に、壁画に海の生物を描いているものが多い。いづれも立派な作品であつて或るものは現代人の手になつたかとさえ疑うまでに優れている（ゲルニア出土、土器蛸図。ミケネー、フィラコーピ出土壁画、飛魚図等々。壺には蛸図が多い。）

羅馬のカタコムブ（地下墓街）の壁に描かれた凶柄は芸術品としては凡そ離れたものであるが、その壁面処々に極めて稚拙な魚の図が描いてあることは、此処を訪れたことのある人には直ちに気のつくことであろう。いづれも画家の筆ではなく殉教者の隠し言葉として描かれたものであつた。魚を選んだ訳は「救い主、^{ソートル}神の子、イエス・クリスト」即ちイエソユス・クリストス、テオユ、ヒーオス、ソートルといふ五語の頭文字だけを拉甸文字に書き直せば I, ch, th, y, s. Ichthys となる。イクチースは希臘語の「魚」という言葉であるから、殉教者達は魚の図を描いて礼拝したのであつた。今日でも魚に関する歐洲現代語には必ず Ichtyo をつければよろしい。例えば Ichtyology 魚類学、Ichtyophage 魚食者等々、未だ沢山の言葉に Ichtyo の前頭語が用ひられている。いづれも魚に関係をもつ単語である。



アケロン河の渡し船
葬用白地レキートス 前四世紀